

献辞 森田 孟先生に贈る

青 木 健

森田 孟先生を成城大学にお迎えして7年の月日が経つ。赴任早々の四月に1年生の担任をお願いして、フレッシュマン・キャンプを経験していただいた。前任校におけるのとは異なる学校行事であり、おそらく戸惑われるだろうと心配された吉田さんの助言に従って、相談相手役として同行した。しかし、その懸念は不要であった。学生たちへの先生の対応と指導はそつがなく、たちまちのうちにフレッシュマンたちの中に溶け込んで行かれた。圧巻は彼らと先生方との懇親会の夕べであった。会の空気が少々しらけ気味になった時、やおらポケットからハーモニカを持ち出された先生は、軽快な曲を優雅に奏でられた。その後も、学生たちの要望に応じて数曲を吹かれて、一座の者を陶醉させた。普段盛り上がり欠ける傾向のある懇親会は、拍手と歓声の中でお開きになったものである。

玄人はだしの先生の芸は、流麗な筆遣いの毛筆にも、裸婦を得意とされる絵筆にも及んでいる。先生からの封書はもちろん、連絡のみの葉書でも流れるような筆遣いに、しばしば感動すら覚えて見入ってしまう。吉田さんは、森田先生の筆による裸婦の絵を学部長室の壁に掲げておられた。先生との交遊は40年を超えるにもかかわらず、いつどのようにこれらの諸芸を身に付けられたのか寡聞にして知らない。おそらく余暇の使い方が達人の域に達しているであろう。

また、先生の短歌とのかかわりあいには、余暇の芸を超えて完全にプロの領域に入っている。長年私淑されていた近藤芳美氏が先年逝去した際、その告別式に参列して来られたと聞くまで、うかつにも先生と短歌との強い結びつき知らなかった。その後、歌人として、50年を超えるキャリアを誇る先生が、歌壇の流れに絶えず視線を注ぎながら、短歌の研究のみならず、創作の腕を磨いておられることを、言葉の端はしから理解するようになった。今回「成城学びの森」での講座「近藤芳美と〈愛の世界〉」では、水を得た魚のように愉しく講義されていることと思うし、出席している受講者の方々は、本物の短歌論を聴くという幸運を味わっているというべきである。

先生に初めてお会いしたのは、昭和40年の6月頃かと思うが、その時には既に奥様を英文科の同僚として存じあげていた。私が初めて勤めた高等学校では、当時新座市の野火止にあった運動場を借りて体育祭を催していた。新婚まもない先生も一緒に来られ、草いきれの中でご挨拶をしたのを覚えている。その後、何度か先生にお会いする機会があったが、程なく奥様は高校教員を辞され東京を去られた。先生が名古屋大学へ赴任されることになったからである。以後先生とのつながりはしばらく絶えたが、ただ一度、先生がイェール大学に海外研修に行かれた（1973～1974年）のを耳にして、ボズウェルの草稿についてお尋ねしたことがあった。先生は研修先のイェール大学から書面で丁寧に応えてくださり、さらに海外研修の意義を強調され、私の海外研修願望を刺激された。

助教授として名古屋大学から筑波大学へ転任されたのは、1976年である。以後2003年筑波大学を定年退官され、成城大学に移られるまでの27年間、学内はもちろん学会等において大活躍された。日本英文学会では、大会運営委員や機関誌編集委員、さらに評議員や理事として任務を全うされたし、日本現代英米詩学会（後に日本英米詩歌学会に変更）では、1990年以降現在に至るまで理事を務めておられ、2001～2007年には会長とし

て会の発展に寄与された。その他、未来短歌会同人や日本文藝協会会員として、日本の文学界との接点を常に見つめられ、外国文学研究者としては稀有な姿勢を保持されている。

学会活動や研究で多忙の中、先生は三人のお子さんたちが通う地区の学校に貢献することを忘れなかった。お子さんたちが小学生の時は、PTA会長（初代）として、茗溪学園中学・高校へ進学すると、父母会会長（二代目）として地域の人々との交流を通してお子さんたちの成長を見守られていたようである。そのお子さんたちは今それぞれの世界で活躍されている。本論集には、二人のお子さんの玉稿が収載されている。

先生の研究業績は、ご自身で纏られた一覧表によると総計 613 点にのぼる。その数に圧倒されて解説する意欲を失いそうになるが、あえて言及させてもらえば、当然専攻領域であるアメリカ文学が中心になる。執筆年別に概観すると、フォークナーを出発点として、ホーソン、メルヴィル、マーク・トウェイン等メジャーなアメリカ小説家の研究から、アップダイク、ソール・ベロー等現代作家へと続いている。しかし、先生のアメリカ文学研究業績の特徴は、同時にアメリカ詩に造詣が深い点である。否、こちらの方が本筋であろう。中でもマリアン・ムーア論は 38 点に及び、女流詩人の詩の世界を多彩な面から分析・研究されている。その各題目は、「擺線の包括——マリアン・ムーアの『結婚』」や「輻輳を内蔵した〈偽装〉——マリアン・ムーアの世界」等独特の色調を帯び、書評子泣かせの難解なものである。おそらく他に表現しえない詩の世界を題目に託したものと思われる。そして、歌集・歌書・歌論・歌集解説等が加わるが、この世界は私にとって未知の領域であり、触れることもできない。先生の文学研究を一言では言い切れないが、あえて言うなら、作家が一文字一文字に命を賭けた以上、それを十全に掬い取るという文学研究の本道を貫いているということであろうか。